

— 報 文 —

## 小学校における国際理解教育向けの教材開発の実践

半 田 博

Record of the practice of the material development for the  
internatinal understanding education in the elementary school

Hiroshi HANDA

### 要 旨

地球時代に生きる児童を国際社会人として育てていくことが求められている。小学校ではその資質を育てるために国際理解教育を進めている。国際理解教育の活動をさらに促進させるためには、児童用の教材や教師用の授業書をより豊かなものにしていくことが大切である。われわれは国際交流、国際連合の働き、国際協力の各分野別に児童向けの図書と教師向けの授業書を開発してきた。本稿は、それらの実践活動の概要についての報告である。

キーワード：国際連合の働き works of the United Nations

国際交流 International interchange

国際協力 International cooperation

授業案 Teaching plan

児童用図書 Lesson book for the material

国際理解教育 International understanding education

### はじめに

周知の通り学校教育は、児童個人の生きたいように生きられるよう個性の発展を支援し、職業への適応を図るといふ個人の要請と、社会の存続と発展といふ社会の要請に応えるために、児童を意図的に体系的に教えようとする営みである。しかし、ともすれば学校教育は前者の個人の要請に応える面に重点が置かれ、後者の社会の要請に応えるという面が軽く扱われる傾向にある。小学校教育でも自己のためにだけ学習するのではなく、他人のために、社会のために何ができるかということに目を開かせ、社会に貢献しようとする態度を育てることが大切である。

21世紀に入った今も2000万人以上が難民化しているといわれている。世界的な規模で起こっている問題は難民問題だけでなく、この他にも食料不安の問題、エネルギー枯渇問題、地球温暖化問題、人口問題、飲料水問題、エイズ問題、麻薬問題、人権問題等が発生している。

このような人類や他の生物の存在基盤を脅かす問題などは一国では解決できないものであるから、国という従来の枠を越えて国際協力による活動を進めることが求められている。

今後、次代を担う小学校の児童に世界的な諸問題の実態を把握させ、世界の人々と互いに手をつないでこれらの問題に立ち向かう態度を育てて行かなければならない。

小学校では国際理解教育を社会科の授業だけでなく、「総合的な学習の時間（以下総合学習と略す）」の授業、及び児童が自発的・自主的に探求する「自由研究」等で進めている。それらの学習活動をさらに促進させるには、教師用の授業書や児童用の図書やその他の資料を今後も開発し、内容をより豊かなものにしていくことが必要である。

本小論では、小学校の国際理解教育に必要な教師用の授業書及び児童用の図書を約15年間開発してきた実践活動の意図及び内容の概要について報告する。

## I. 教材開発に取り組んだ動機

はじめに国際理解教育に取り組んだ動機を明らかにしておこう。

われわれ<sup>1)</sup>が国際理解教育の研究に踏み出したのは15年前である。われわれはそれまでに小学校社会科の工業学習<sup>2)</sup>、農業学習<sup>3)</sup>、地域社会学習<sup>4)</sup>、及び家とその暮らし学習<sup>5)</sup>のカリキュラム編成の研究をしてきた。それらは、当時のカリキュラムの現代化の思潮に即したものであり、わが国の産業学習、地域社会学習や低学年社会科などの学習内容を構造的に体系化したものであった。しかし、この時点では国際理解教育の視点に立った内容はまだ含んでいない。

われわれが国際理解教育の視点から社会科の内容編成を試みたのは水産業学習からである。

筆者は前述したように社会科のカリキュラム編成に関する研究を主な研究課題にしているが、一方、児童の自由研究の指導方法<sup>6)</sup>についても興味・関心があったので、児童の自由研究の作品を集めるために各地の小学校を訪問した。“海と魚に関する自由研究作品コンクール”を朝日新聞社と共催し、多くの自由研究の資料を刊行していた日本水産を訪ねたのもその頃である。その会社の広報担当から水産業に関する最新情報などを聞くことができた。以下はその概要である。

従来沿岸で操業していた漁師が、今は航空機で南アフリカの漁場まで出向いて“まぐろ”を採っていること、アメリカが自国のアラスカ漁場で採った魚を日本の水産会社が直接その漁場まで行って買いつけていること、200海里は水産資源の保護というより海底に埋蔵されている鉱物資源の確保が優先する形で結ばれたこと、世界第一の魚の消費国であるわが国は、世界の漁獲高を維持しているが、それでも需要を賄いきれず輸出国から輸入国へと大きく変化<sup>7)</sup>していること、世界の水産資源を維持するために国際的な取り決めや、さまざまな国際的な活動がなされているという内容であった。

これらの内容は、筆者が抱いていた水産国日本のイメージ<sup>7)</sup>を大きく変えるほど衝撃的なものであった。この情報が、水産業学習の内容を再編する際に、国際理解教育の視点を導入する

手がかりをわれわれに与えてくれた。

本実践は以上みてきたように素朴な動機から始めたが、最初から国際理解教育について体系的な枠組みを立てて進めてきたわけではない。われわれの教材開発は水産業学習の児童用図書や授業書を作り始めてから、順次国際連合、国際協力、国際交流へと進めていくうちに国際理解教育を構成している各分野へと広がり、結果として体系的な形をなしてきた。

ところで児童にとって学びやすく、かつ意味のある教材とするにはどのような工夫をすればよいだろうか。われわれは新しい教材を開発するにあたって、次に示す基本方針に従った。

## II. 教材開発の基本方針

地球時代に生きる児童にどのような認識を得させることが必要であろうか。われわれは、小学校の児童を対象とする国際理解教育の教材として児童用図書と教師用授業書の開発をしてきたが、それらの開発の基本方針は次の通りである。

### (1) 分野

国際理解教育は国際理解（異文化理解）と国際協力の理解及びこれらの基盤となる平和・人権及び基本的自由についての教育を含むものであるが、われわれは国際交流（他の国々）、国連の活動、国際協力の3つの分野に絞り、各分野別に独自の内容で構成した。なお、平和、人権、基本的人権は国連の活動の分野に含めた。

### (2) 内容構成

#### ①国際交流についての内容構成

「国際交流」の分野では、児童に世界の国々について興味・関心をもたせるとともに、これらの国々とわが国との関係について理解させ、その上で、それらの国々と望ましい関係を打ち立ててゆく意欲と能力を養うことを意図して内容を構成した。以下2つの面を取り上げた。

第1に、産業面では我が国と他の国との結びつきを取り扱った。ここではすべての産業を取り上げるのではなく、生活の基盤をなしている食糧生産や自動車産業などについて、世界とともに生きるわが国の産業の現状、とくに他国の産業との協調（貿易、投資、援助、資源保全の方策）、他の産業との相互関係、及び今後の課題等の内容で構成した。

第2に、他の国々の人々の生活や文化について扱った。児童に身近な学校生活の様子、遊び、食事のしつけかた、親子間のありようなど、それぞれの国の人々の「思考様式や生活様式等や価値観等」の違いを浮き彫りにできるような内容で構成した。

#### ②国連の活動についての内容構成

国連の活動については、世界の諸問題（例えば難民問題、食料不安の問題、エネルギーの枯渇問題、地球温暖化問題、人口問題、飲み水問題、エイズ問題、麻薬問題、人権問題、絶滅のおそれのある野性動植物の問題、内戦、貧困等）に対応して取り組んでいる国連の諸機関の活動を中心にすえた。その他、国連の設立過程と目的、主要機関の構成と任務、国際紛争の解決

方式、国連ファミリーの活動、及び私たちにできることなどの内容で構成した。

### ③国際協力についての内容構成

開発途上国では、貧困、食料不安、安全な飲み水の欠如、非識字者問題、環境、人口、難民、エイズなどの地球規模的な問題等を抱えている。これらの諸問題の中から、とくに顕著な支援活動の実績を挙げている、飢え、保健衛生、教育、難民、地球環境等の分野を内容として取り上げ、経済協力、資金協力、技術協力の側面から問題解決に取り組んでいるわが国の海外青年協力隊や NGO の活動を扱った。

### ④教師用の授業書と児童用図書との連関

国際交流や国連の活動に関する授業を活発に行うには、教科書だけでなくそれに関する児童用図書を積極的に活用させることが必要である。その場合、児童用図書の内容をどのように編成すればよいだろうか、とくに留意した点は次のごとくである。

第 1 に、授業の内容と関連づけること。第 2 に、発展的な学習ができること。第 3 に、最新のデータであること。

### (3) よりリアルな資料の収集

国際交流や国連の活動についての児童用図書の原資料は、できるだけ日本に事務所を開いている国連の機関を訪ねて最新の資料（写真、統計、活動内容等）を入手できるように努めた。国際交流の資料、国際協力の分野での NGO の活動、『世界とともに生きる日本の産業』の資料などは可能な限り在日外国人や企業等を訪ねて聞き取り調査を行うなどして、できるだけ児童に、よりリアルな理解を与えられるように努めた。

## III. 教材開発の実践

次に示す国際理解教育教材（児童用図書）及び教師用授業書は、上記教材開発の基本方針に基づいて具体的に進めてきた実践活動の概要である。

### 1. 国際交流の分野①－産業面での交流

わが国の産業と他国との関係に関する内容はいつ頃から学習指導要領に表れたのであろうか。それをまず明らかにしておこう。

昭和53（1978）年度『小学校指導書社会科編』5年生の産業学習には、我が国の産業と他国との関係についてまとまりのある内容はとり上げられていない。6年生の「世界の国々」の単元に、貿易の上で深いつながりがある国々を理解させる内容を設けていたが、産業と貿易とは別の単元で扱っていた。両者を関係づける内容になったのは平成元（1989）年度版からである。

しかし、周知の通りこの改訂以前から、既に教育の現場でも「産業面での国際的な結びつき」についての内容を学習させることが必要であるという思潮は高まっていた。われわれが国際理解教育に関心を抱いたのもこの頃である。

現行の指導要領では、5年生の産業学習で「工業生産を支える貿易や運輸の働き」を、同じく食料生産の学習で「食料の中には外国から輸入しているものがあること」というように、産業単元ごとにその活動と対応する形で貿易との関係を学ばせることになっていた。従来のものと比べて両者間の関係がより鮮明になったといえよう。

わが国の基幹産業は今や他国との協調なしに進めることはできない。貿易、投資、援助、資源保全の国際的な取り決めなど、すべての分野で国際間の結びつきは強められる傾向にある。

以下に示す児童用図書『世界とともに生きる日本の産業』（全12巻）<sup>8)</sup>及び授業書<sup>9)</sup>は学習指導要領が昭和53年版から平成元年版へと移行する後半の時期に作成したものである。

### (1) 児童用図書の開発

表1 『世界とともに生きる日本の産業』〈巻名と主要な内容〉

世界とともに生きる日本の産業（全12巻）	
巻の名	主な内容
1. 世界の海からこんにちは <漁業>	・世界一の漁業国、魚介類の輸入国、水産資源の保全の国際協力、漁業技術の輸出
2. 3分間でホットな関係 <食品>	・世界の人が食べているカップめん、世界に広がるカップめん工場
3. 地球を舞台に車が走る <自動車>	・外国の協力で自動車ができる、世界一の日本の技術、世界の発展に寄与する自動車
4. 笑顔あざやかテレビジョン <家庭電気>	・世界のことはテレビジョン、世界の茶の間に日本のテレビ、地球の裏側が映るわけ、テレビができるまで、世界を結ぶテレビ会議、世界の動きを教えるテレビ
5. レンズは写す世界の顔 <カメラ>	・世界の街の日本のカメラ、世界と日本のカメラの歴史、外国での日本のカメラ工場
6. 国をつくる街をつくる <建設>	・アジアとヨーロッパを結ぶ橋、外国の資材を使う日本のビル、新しい都会の風景
7. 世界のくらしと産業をささえる <商社>	・超高層ビル、宇宙へ出ていく日も遠くない、建設は交通をも支える
8. 地球の裏もおとなりさん <運輸>	・輸出入しているもの、世界は貿易で成り立つ、世界の産業を支えている商社
9. 「ハロー」「モシモシ」世界を結ぶ <通信>	・世界を飛び回る日本人、ジャンボ機を動かす人たち、さかんになった外国との交流
10. 世界のニュースを伝える <新聞>	・国際通信の歴史、国際通信とビジネス、海底ケーブル通信の仕組みと働き、国際通信網、21世紀の通信、通信技術の輸出、世界の人々と平和な暮らしのために
11. 広告でとどける夢と情報 <広告>	・新聞の役割、新聞社の仕組み、海外のニュースをまとめる外報部、世界の新聞
12. 地球はまわるお金もまわる <銀行>	・オリンピックで活躍する広告会社、国際的になった広告の仕事、広告を作る人たち
	・為替の仕組み、お金の中心地東京、海外で活躍する日本の銀行、金融の自由化

学習指導要領や教科書には産業と他の国々という国際間の結びつきという内容は、今まで述べてきたように体系的な形で取り上げられていない。しかし、そうだからといってまったく扱われていないわけではない。例えば、わが国は水産物の輸入量が多いこと、水産資源を増やすことは世界的な課題であること、わが国が外国で魚を採るためには世界の人々と協力していくことが必要であることなどについて数行であるが記述されていた。

これらの内容については年齢の進んだ段階でまとまりのある内容を教えた方が良いという考えもあるが、われわれは児童に他国の人々とあい携えて努力する意欲と能力とを育てるためには、できるだけ早い時期から産業面での国際的な結びつきについて学べる機会を与えたいと考えた。そのような意図で、われわれは<表1>に示す如く、児童にとって身近な漁業、食品、自動車、家庭電気、カメラ、建設、商社、運輸、通信、新聞、広告、銀行などわが国の典型的な基幹産業を取り上げた。

## (2) 授業書の開発－水産業学習を例にして

われわれが開発した上記の図書を実際の授業にどう生かしたか、水産業学習を具体例として挙げてみよう。われわれは、小学校社会科5年の水産業学習の授業の構想について、1989年に開かれた日本社会科教育学会で「国際時代に対応する水産業学習の授業設計」<sup>9)</sup>と題して発表した。なお、その授業計画に授業案をそえたものを「日本の水産業の学習計画」と題して大学生用のテキスト<sup>10)</sup>に集録し、授業案を設計するさいのモデルとして活用できるようにした。

従来教科書を中心とした水産業学習の授業は、とる漁業と育てる漁業の2つから構成されていた。前者では、わが国は周りを海で囲まれ良い漁場になっていること、沿岸漁業・沖合漁業・遠洋漁業などが行われていることなどの現状などについて概観させたのち、典型的な漁業基地の事例をあげて、生産を高めるために働いている人々の努力や工夫を扱っていた。後者では特定の地域を取り上げ、育てる漁業の様子、水産資源を維持したり増やしたりするための工夫や日本が抱えている問題などを扱っていた。したがって水産業と貿易との協調関係、持続的な水産資源の開発と他国との協力、開発途上国での技術援助などの面が希薄になりやすかった。われわれは、これらの内容を補う形で、国際理解という視点<sup>11)</sup>に立って授業案を再構成した。

第1点は他の国とわが国との関わり方の内容である。原材料の輸出入、製品の輸出入、技術の輸出入などの面での各国との結びつきや問題点及び日本企業の現地進出の現状と問題点などの内容を加えた。

第2点は水産業を促進させるための国際的なとりきめや、援助協力の現状に関する内容である。

第3点は水産業を営む上で地球的な規模で起きている問題とその解決の仕方に関する内容である。

この授業書は、当時からみれば学習指導要領の内容を一部越えた発展学習的なものであったが、国際的な依存関係によって水産資源から恵みを受けていること、水産資源の持続的な開発

を進める上でも国際的な協力が必要であることなどについて理解させることを意図したものである。

## 2. 国際交流の分野②－文化面での交流

平和を実現し、維持していくためには、ユネスコ憲章が示しているように異文化の理解は不可欠である。

現行の学習指導要領では、異文化理解に関する内容として社会科の6年生で取り扱っている。「国際交流については、我が国と外国とのスポーツや文化などでの国際交流の様子を（中略）具体的に調べることであり」とし、例えば、「オリンピックなど海外での各種のスポーツ競技や、歌舞伎、能、琴の演奏などの海外公演、柔道や剣道等の伝統的武道の外国の人々への紹介、外国の絵画や舞踊、音楽などの日本での展覧会や公演などを取り上げ世界の人々と互いに親善を深めている様子を調べる」ことが考えられるとしている。

われわれは、異文化理解には、それぞれの国の人々の思考様式や生活様式を理解することから始めることが必要であると考えている。それらを理解させるには、小さい頃から他国の児童と一緒に遊び、勉強し、食事し、共同生活するという体験を理解させることが望ましいが（一部の小学校では総合学習で行っている）、現状では難しい面もあるので、児童用図書や社会科の授業でできるだけ他国の学校での生活の様子や遊び・食事の仕方などについて学習することが必要である。

上のようにして他の国のことに関心を持ち始めたら、次にそれぞれの国の文化や風俗・習慣などについて学習を進められるように配慮した。学習対象として取り上げる国はできるだけ各地にまたがり、いわゆる先進国と開発途上国のいずれも含むようにした。また、日本と文化・生活様式・政治体制・経済体制などの異なる国を選ぶようにも配慮した。

とくに開発途上国は貧しくてかわいそうだとか、異なった風俗でおかしいというような蔑視的な理解を与えないようにした。そのためには、異文化のもつ価値を相対的にとらえること、各国の文化には優劣はないこと、そしてそれなりの固有の尊さがあること、自国の文化や特定の文化を絶対視しないという、開かれた態度を養うように留意した。

### (1) 児童用図書の開発<sup>12)</sup>

われわれは母国の文化を日本人に伝えたり、日本の文化を学んだりしている在日外国人に直接面接し、そこで得た内容を〈表2〉の如く構成した。一覧すれば分かるように開発途上国や先進国などいずれの出身国にも偏らずに、できるだけ広範囲にいろいろな国の人たちを登場させた。今回は在日外国人の活動に重点をおいて内容を編成してきたが、今後は在外日本人の活動を取り上げたい。現在、日本人の目で見たと外国の小学校教育のようすや、こどもたちの遊びなどを中核にして資料を収集しているところである。

表2 『国際交流』＜巻名と主要な内容＞

シリーズ・国際交流（全5巻）			○内は居住地	出身国	
第1巻 わたしたちの暮らしのなかで			・わがペンションへどうぞ（滋賀）	アメリカ	
・下町だいき <sup>13)</sup>	（東京）	アメリカ	・タイ料理はいかがですか（京都）	タイ	
・わたしは町の自治会長	（新居浜）	カナダ	・使ってくださいわたしの茶わん（栃木）	アメリカ	
・家族が一番	（姫路）	インドネシア			
・クリーンビーチ大作戦	（沖縄）	スペイン	第4巻 自国の文化を広める中で①		
			・小説をかく <sup>16)</sup>	（東京）	ポーランド
第2巻 日本の文化・伝説のなかで			・パイプオルガンをひく <sup>17)</sup>	（岡崎）	スイス
・南の空に三枚の音 <sup>14)</sup>	（沖縄）	アメリカ	・サッカーを教える <sup>18)</sup>	（大阪）	北朝鮮
・ただいま生け花修業中	（東京）	マレーシア	・これがラテンの文化です	（福岡）	アルゼンチン
・お酒づくりに励んでいます	（奈良）	イギリス			
・わたしを変えた柔道	（岡山）	フィリピン	第5巻 自国の文化を広める中で②		
・農業技術の研修	（岡山）	中国	・わたしはオペラ歌手 <sup>19)</sup>	（東京）	韓国
第3巻 作って、売って、もてなす中で			・英語の地図を作っています	（今治）	オーストラリア
・ドイツのパンを皆さんに <sup>15)</sup>	（神戸）	ドイツ	・中国文化は6千年 <sup>20)</sup>	（東京）	中国
			・工業技術の研究者	（岡山）	スウェーデン

## (2) 授業書の開発

小学校の段階での異文化理解は、他国について興味・関心を高めることから始めることが大切である。

そういう意味でまず「インドのカレーはなぜ辛い・インドの風俗や文化を探る」と題する授業プラン<sup>21)</sup>を作成した。この授業のねらいは、インドの食生活について理解させることに主眼をおくが、さらに一步踏み込んでインドの衣・住生活やインド人の習慣・文化などについても初歩的な理解を得させ、国際社会のさまざまな社会事象に目を開かせることなどを意図した。

インドでカレーが食されるようになった原因は児童が抱いていた予想とかなり異なったところにあった（注・インドは昔良い飲み水に恵まれていなかったもので、お腹に入る悪い細菌をカレーを食べることで防いでいた。安全な飲み水が得られる今日でもその食習慣が続いてきている）という驚きからこの授業は始まる。この驚きを課題追求のバネにして、インドの食習慣やその他のインド特有の文化を調べる、という授業過程を組み立てた。



総合学習の授業では、他国の子どもを学校に招いて日本人の児童とともに遊んだり、食事をしたり、あるいは外国人から直接その国特有の調理法を習うなど、体験的な活動をともなう国際交流が活発化している。今日にあっては、ここに示した当時の形態で進めるよりも、異文化理解については導入的な部分を社会科で行い、さらに深化した学習を総合学習として取り上げれば、ある程度体系的で、かつ中身の濃い学習ができるかもしれない。

### 3. 国連の活動の分野

児童になぜ「国連の活動」について学ばせるのだろうか<sup>22)・23)</sup>。われわれは児童に世界的な規模で起きている諸問題および、それらの解決に取り組んでいる国連の活動などについての理解を深めることによって、世界で起きている諸問題を世界の人々とあい携えて解決しようとする態度を育てたいと考えたからである。

国連は世界の平和と安全を維持するためのシステムとして創設されたこと、現在では、世界的な規模で起きている諸問題の解決に向けても活動していることなどについて、児童に正しい理解を得させるとともに、国連の活動に対しての関心を深めさせたい。

そのような意図で『シリーズ・国連』と題する児童用図書<sup>24)</sup>と、その図書を教材とした授業書<sup>27)~30)</sup>を作成した。

#### (1) 児童用図書の開発

前述したごとく21世紀は前世紀から引きずってきている世界的な規模による諸問題が起こっており、それらの解決に目を向けなければ平和な社会の実現は難しい。この『シリーズ・国連』では世界的規模で起きている諸問題と、それらの問題に対応する形で解決に努めている国連の諸機関の活動を取り上げた。後述するように国連の活動についての学習は小学校6年生で学ぶことになっている。しかし、国連の活動についての児童用図書は発行点数が少なく、国連の活動について体系化された児童用図書は皆無であった。当時は児童が資料を活用して学習するにはあまりにも資料不足であった。それを補うために、われわれは『シリーズ・国連』を出版することにした。

次にこの本の構成について述べてみたい。この本は世界的規模で起きている諸問題と国連の活動との2つの内容で構成した。

#### ①世界的規模で起きている諸問題

世界的な規模で起きている内戦をはじめとして、難民、貧困、エネルギー資源、環境、食糧、人口、麻薬、エイズ、埋設されている地雷、宇宙空間の平和利用などの諸問題と平和の大切さ、人権（アパルトヘイト、子どもの権利条約など）、基本的自由（植民地からの独立など）の諸問題を取り上げた。

#### ②国連の活動

国連の活動については世界的な規模で起きている問題と対応させる形で内容を構成した。

例えば、食料不安の問題の解決に取り組んでいるのはユニセフだけでなく、国際食糧計画や国際食糧農業機関、国連の総会など多くの機関が関わっている。食糧不安が発生している国は、その背後に貧困、農業問題、非識字問題、安全な飲み水問題などをかかえているわけであるから、それらが発生している要素を完全に取り除かなければ食糧問題の本質的な解決はできない。国連はそのような意味で多方面からこの問題の解消に向けて取り組んでいる。したがって、国連の活動を理解させるためには、できるだけ世界の諸問題を明らかにし、それらの問題と国連の諸機関との関係に対応させながら学習することが必要であると考えた。われわれが編集した国連にかかわる児童用図書『シリーズ・国連』の巻名と主要な内容は<表3>の如くである。

国連は世界の諸問題の解決に向けて活動しているが、その活動に問題がないわけではない。国連は環境破壊や大量の難民の出現などに代表される地球的規模の問題に対して必ずしも十分に対応できているわけではない。さらに安全保障理事会の改革問題、国連の財政危機の問題等の検討課題を抱えている。上記の児童用図書ではこれらの問題点について触れていないが、避けては通れない問題である。今後どのような形で記述すればよいかは筆者の課題でもある。

この『シリーズ・国連』が出版されて既に10年を経過し、世界の情勢も国連の活動の力点も

表3 『シリーズ・国連』<巻名と主要な内容>

シリーズ・国連 (全6巻)	
巻の名	主な内容
1 国連のしくみとはたらき	・国連の設立過程、国連のしくみ、専門機関と補助機関の目的の働き、国連の職員の仕事内容、国連の活動費、日本にある国連機関、NGOの働き
2 平和のとりくみ	・今もつづいている紛争、国連安全保障理事会の役割と活動事例、国連の平和維持軍、軍備管理と軍縮、国際司法裁判所の働き、宇宙の平和を守る、原子力の平和利用、
3 人権へのとりくみ	・くらしのなかの人権、人権を守る国連の活動、女性の権利を守る、アパルトヘイト問題への闘いと国連の働き、植民地の独立、先住民族の権利、難民、国連と人権NGO
4 いのちを守る	・飢えと貧困(各国の食糧事情、貧しい国と豊かな国)、生きるために食べる(開発途上国への国連の食糧援助活動)、子どもの命と健康、人口増加と都市爆発と国連の活動、しのびよる麻薬と国連の活動
5 環境へのとりくみ	・地球規模の環境破壊の現状、地球温暖化を考える、「持続可能な開発」へ、地球規模の取り組み、海から地球を考える、私たちに何ができるか
6 子どもの権利条約	・静かな緊急事態、権利条約ができた理由、自分で読む権利条約、(1~3、6~9、12~16、18~19、23~25、27~37、40、42条)

大きく変動しているので改訂版を企画している。しかし出版界全体が不況という厳しい状況下にあるので実現することはかなり難しい。われわれは出版情勢が改善されることを期待しながら、よりよい児童書をつくるために今も資料を収集しているところである。

## (2) 授業書の開発

現行の学習指導要領では「国際連合の働き」の内容を小学校の第6学年に設けている。ここでは、「平和な社会の実現に努めている国際連合の働き」を理解させようとしている。ただし「国際連合の働きについては、学習が網羅的で抽象的にならないようにするためにユネスコやユニセフという児童にとって身近な活動を取り上げるようにすること」<sup>26)</sup>と明示されている。したがって多くの教科書はユネスコやユニセフの活動を取り上げている。児童の認識力の発達段階を考慮してのことであろう。

さらに、今回の学習指導要領では学習内容を大幅に削減するとともに学習時間も短縮した結果、この「国連の活動」単元はかなり軽い扱いになっている。

われわれは、「平和な社会の実現に努めている国際連合の働き」を理解させることは重要な内容であると考えている。したがって、この軽く扱われている部分を発展学習や総合学習で扱うことを前提にして授業書を作った。

われわれはその際、ユネスコやユニセフといった国連の機関ごとにそれぞれの働きを理解させるのではなく、世界的な規模で起こっている諸問題とその問題の解決に努めている国連の活動という視点で内容を構成した。たしかに、前者のように扱うことにも意味はある。ユネスコやユニセフの機関について児童はよく知っている。募金活動をした経験があるとか、日本もユネスコの世界遺産に登録されたとか、日本ユネスコ協会が世界寺子屋運動を進めているとかなどについての知識を児童は有しているかもしれない。しかし、このような国連の機関ごとに調べていくような学習の方法以外にも意味のあるやり方はあるのではないだろうか。

われわれはそういう意味で国連の設立過程や目的、仕組みなどについて学ばせたのちに、世界的な諸問題の中から児童の関心の強いものを1つか2つ選ばせて、それらの問題の解決に向かって活動している国連の諸機関の働きをリアルに把握させようと思う。

学習を進める中で、私たちに何ができるか、なぜ協力しなければならないのかについて考えさせる機会を与えることによって、「人を人として大切にする」精神を陶冶したいと考えている。国際理解の目標はその精神を培うものでありたい。

国連の活動についての授業書として、難民<sup>27)</sup>、飢え問題<sup>28)・29)</sup>、飲み水問題<sup>30)</sup>をすでに作った。今、児童の自由研究を支援する手引書として、難民<sup>31)</sup>、食料不安<sup>32)・33)</sup>、環境問題<sup>34)</sup>、飲み水問題<sup>35)</sup>、人口問題<sup>36)</sup>、人権問題<sup>37)</sup>、原子力問題<sup>38)</sup>、非識字問題<sup>39)</sup>、麻薬問題<sup>40)</sup>に関する開発を進めている。

#### 4. 国際協力の分野

世界で起こっている諸問題の解決に向けて国連は取り組んでいるが、民間組織（NGO）、政府の援助を受けている団体、個人などが同様の取り組みをしている。

国連は加盟国政府による話し合いが主となるが、NGOは草の根的存在で、手となり足となって現地の人々の救済にあたっている。これらの活動なしには今日の大きな問題を解決することはできない。

現行の学習指導要領<sup>41)</sup>では、国際協力に関する内容として社会科の第6学年で取り扱っている。国際協力については「我が国の国際協力の様子」を調べることとし、例えば「青年海外協力隊や日本赤十字社などの海外での活動を取り上げ、我が国が世界の平和や発展のために貢献していることを調べられることが考えられる」としている。

われわれは、国際協力の機関として最大規模をもつ青年海外協力隊や日本赤十字社の他に、我が国の規模の小さいNGOも取り上げた。

NGOの活動範囲はさまざまであるが、われわれが取り上げたNGOは大別すると次の3つになる。

- ・自然保護の活動をしているNGO
- ・人権擁護の活動をしているNGO
- ・教育と保健医療の活動をしているNGO

授業としては、上のなかから1つか2つのNGOの活動を選んで教えたい。なお、児童用図書を作成する場合は、上に大別した3つの分野ごとにそれらの活動の様子を内容として載せることにした。

##### (1) 児童用図書の開発

われわれは国際協力の活動の様子を体系的にまとめた児童用図書『シリーズ・国際協力』<sup>42)</sup>を作成した。

本書は、地球的規模で起こっている諸問題の中から、日本人が直接現地住民の問題に取り組んでいるNGOや海外青年協力隊の活動の様子、とくに飢え、保健衛生、教育、難民、地球環境での分野で活動しているようすをまとめたものである。

われわれが編集した『シリーズ・国際協力』の巻名と主要な内容は<表4>の如くである。編集にあたってはできるだけリアルな内容にするため、NGOの事務所を直接訪ね、活動に取り組んだ動機、その具体的な内容や喜び、反対にそれに伴う苦労や問題点など、最新の情報を入手するように努めた。

表4 『シリーズ・国際協力』〈巻名と主要な内容〉

シリーズ・国際協力（全6巻）	
巻の名	主な内容
1 食べ物をつくり不公平をなくそう 〈飢え〉	・いのちをつなくための援助（緊急支援の必要性、北朝鮮と食糧問題）、飢えからの脱出（青年海外協力隊の活動、曹洞宗ボランティア会の活動）、世界から「飢え」をなくすために。
2 健康を育み病気をなくそう 〈保健衛生〉	・子どものいのちと健康のいま、いのちを救う人たち（子どもたちに栄養を、ライ病をなくすために、自分たちの手で下痢をなくす）、世界各地で医療協力するNGO、健康の「南北問題」を想えて。
3 とともに学び知識をひろげよう 〈教育〉	・字が読める勉強ができる（カンボジアの子どもに絵本を、子どもたちに進学のコツを、子どもたちに校舎をおくる）、技術を伝えるための教育、村おこしのための教育、学んでなんだろう。
4 くらしをささえ文化をとりもどそう 〈難民〉	・こわされた家、失った祖国、難民の命を救う（旧ユーゴスラビアの子どもたちに笑顔を、医療援助するAMD、衣料を送る）、難民の自立を助ける、国内の難民に手をさしのべる。
5 環境をまもり未来へわたそう 〈地球環境〉	・地球のかかえる大きな問題、環境問題に取り組む人たち（チャドの砂漠化を救え、ベリーズの自然を守る）、メコン川流域の開発計画）、これからの生き方（ゴミから社会をみつめてみよう、地球環境を考える子）
6 国際協力のいま―たすけあう世界、わたしたちができること―	・わたしたちと世界、世界の人を助ける国際組織、日本のODAによる国際協力、市民・自治体・企業による国際協力、わたしたちができること（世界の人々の暮らしを知ろう、いまからできる国際協力）

## (2) 授業書の開発

この内容に関しては、NGOの活動だけを単独に扱った授業書としては作成していない。世界の諸問題の解決に取り組んでいる機関の1つとして扱ったのは「国連の活動」の分野に含めて指導しようと考えたからである。実際の活動においても両者は車の両輪のような存在だからである。

NGOの活動の内容を指導する場合、以下に述べる理由から、日本が世界から受けている恩恵についてもふれさせたい。

世界が抱えている問題に対して、かつて新聞やテレビはカンボジア問題等に日本が貢献している姿を報道していたことがあった。授業でも同じように日本が貢献している姿だけを教えるはないだろうか。このような面だけを強調すれば、日本はあたかも世界に貢献する優秀な国家として児童の目に写るに違いない。

1988年7月26日朝日新聞は「日本の人権に懸念続出」という見出しで、精神医療、アイヌ先住民族、代用監獄に人権侵害の問題があると報道した。その年の11月、国際的な人権NGOは日本に代用監獄制度の調査団を送った。調査した結果を報告書にまとめ1989年2月の国連人

権委員会に提出した。人権 NGO は代用監獄制度が人権侵害にあたり、国際法違反であると日本政府を糾弾した。さらにアムネスティ・インターナショナルは1990年に同じような勧告をだした。外国の NGO からこのように指摘されたことによって、おそまきながらこの人権侵害問題について日本人の目が開かれたといえる。このような事柄としては、サハリンの残留朝鮮人の帰国問題や部落問題が過去にあった。

したがって、日本が世界で起こっている問題解決に向けて協力している事実を教えるとともに、世界の NGO から受けた恩恵についても同じような度合いで教えることが大切である。

#### IV. 今後の課題

われわれは、国際交流、国際協力、国連の活動に関する児童用図書と、それらの本を資料として授業に活用する教師用授業書の開発を進めている。しかし未開拓の領域や再構成すべき内容などが堆積している。さらに小学校で「学習の仕方を学習する」教育を盛り上げていくことが今後も求められる。

われわれは、児童や教師の新しい要求に応えるとともに、世界のすべての人々が豊かな生活を享受できる社会を築いていけるように、「人を人として大切にする」精神を陶冶し、世界の諸問題を世界の人々とあい携えて解決しようとする意欲と能力を育てる教材開発を今後も進めていきたい。

#### 注

- 1) 筆者と蔵元幸二(当時公立小学校校長、現青山学院大学講師)他、社会科研究グループのメンバー
- 2) 古銭良一郎編著『小学校社会科 工業学習の構造化』東洋館出版社 1975
- 3) 古銭良一郎、半田博編著『小学校社会科 農業学習の構造化』明治図書 1977
- 4) 古銭良一郎、半田博編著『小学校社会科 地域社会学習の新構想』中教出版 1978
- 5) 古銭良一郎、半田博編著『小学校社会科「家とその暮らし」新しい指導計画と実践』東洋館出版社 1980
- 6) 古銭良一郎、半田博編著『こどもに探求させる社会科の自由研究』東洋館出版社 1985  
同上『理科・創意工夫の自由研究』東洋館出版社 1987
- 7) 「昭和34年まで輸入量はなく、国内生産量の約1割を輸出していた。昭和48年頃輸入量が輸出量を上回るようになった転換点」(創業75年記念魚資料「漁労・栄養・統計」日本水産 1986
- 8) 半田博・蔵元幸二他『世界とともに生きる日本の産業』(全12巻)リブリオ出版 1989
- 9) 半田博他「国際時代に対応する水産業学習の授業設計」と題して日本社会科教育学会にて1989・8発表
- 10) 拙著『「日本の水産業」の学習計画』pp213~227(古銭良一郎、半田博編著 小学校社会科の新しい視点と展開 青学出版 1992 所収)
- 11) 拙著『国際理解を深めさせる図書資料の活用—水産業学習を例にして』SEIセイ 夏号 図書館流通センター 1994 pp32~34

- 12) 入江昌明・蔵元幸二・北岡章宏・半田博共著「国際交流」EXP 2003 出版予定
- 13) 半田博・蔵元幸二・他『私たち，下町が大好きですー隣人とのコミュニケーションが第1歩ー』 母と子 9月号 母と子社 2000 pp4~11
- 14) 蔵元幸二『三線さんかっこいいねーバイロン・ジョンズさんに聞くー』 母と子 2月号 母と子社 2001 pp40~43
- 15) 半田博・北岡章宏『皆が同じ地球人になることが願いー神戸のジャーマン・ベーカリーのお店からー』 母と子12月号 母と子社 2000 pp41~48
- 16) 半田博・蔵元幸二『アイデンティティはケーキと同じーマレック・カシミンスキさんに聞く』 母と子 1月号 母と子社 2001 pp4~9
- 17) 拙著『日本人は自国の文化を意識しないーヨーロッパ人と日本人の違い』 母と子 8月号 母と子社 2000 pp4~11
- 18) 拙著『民族の壁を乗り越えるサッカーパーク・スヨンさんに聞くー』 母と子 3月号 母と子社 2001 pp44~48
- 19) 拙著『オペラは国境を超えてー在日コリアン2世として』 母と子10月号 母と子社 2000 pp4~11
- 20) 拙著『日常生活に見る中国と日本の文化の違いエキ・ビンさんに聞く』 母と子11月号 母と子社 2000 pp38~45
- 21) 古銭良一郎，半田博編著『小学校 国際理解教育の授業』 東洋館出版社 1989
- 22) 拙著『「国際連合の活動」をどう教えるか』 論攷第46号 神戸女子短期大学 2001 pp61~80  
拙著「なぜ「国際連合の活動」を学ばせるのか」 母と子 4月号 pp43~47
- 23) 前掲書『「国際連合の活動」をどう教えるか』 pp74~75
- 24) 半田博・蔵元幸二他著『シリーズ・国連』（全6巻）リブリオ出版 1993
- 25) 前掲書『「国際連合の活動」をどう教えるか』 pp64~67
- 26) 文部省『小学校学習指導要領解説 社会編』 日本文教出版 1999 pp108~109
- 27) 奥山晃弘，半田博編著『総合演習ワーク・ノート』 田研出版 2000 pp158~169
- 28) 前掲書『「国際連合の活動」をどう教えるか』 pp76~77
- 29) 入江昌明，半田博編著『教育実習』 EXP 2001 pp108, pp116~117
- 30) 前掲書『「国際連合の活動」をどう教えるか』 pp72~73
- 31) 拙著『難民問題と国連の取り組みー子どもに何を，どのように学ばせればよいかー』 母と子 5月号 母と子社 2001 pp41~45
- 32) 拙著『世界の食料不安の問題と国連の取り組みー子どもに世界の食料不安の現状をどう学ばせるかー』 母と子 6月号 母と子社 2001 pp41~45
- 33) 拙著『世界の食料不安の問題と国連の取り組みー国連の活動をどう学ばせればよいかー』 母と子 7月号 母と子社 2001 pp40~43
- 34) 拙著『世界の環境問題と国連の取り組みー子どもに何を，どのように学ばせればよいかー』 母と子 8月号 母と子社 2001 pp39~43
- 35) 拙著『世界の飲み水問題と国連の取り組みー子どもに何を，どのように学ばせればよいかー』 母と子 9月号 母と子社 2001 pp44~48
- 36) 拙著『世界の人口問題と国連の取り組みー子どもに何を，どのように学ばせればよいかー』 母と子10

- 月号 母と子社 2001 pp42～46
- 37) 拙著『世界の人権問題と国連の取り組み—子どもに何を、どのように学ばせればよいか—』 母と子11月号 母と子社 2001 pp44～48
- 38) 拙著『世界の原子力問題と国連の取り組み—子どもに何を、どのように学ばせればよいか—』 母と子12月号 母と子社 2001 pp44～48
- 39) 拙著『世界の非識字者問題と国連の取り組み—子どもに何を、どのように学ばせればよいか—』 母と子1月号 母と子社 2002 pp44～48
- 40) 拙著『世界の麻薬問題と国連の取り組み—子どもに何を、どのように学ばせればよいか—』 母と子2月号 母と子社 2002 pp43～48
- 41) 前掲書『小学校学習指導要領解説 社会編』 p108
- 42) 半田博・蔵元幸二他著『シリーズ・国際協力』(全6巻) リブリオ出版 1997